

Stephen Crane: *The Blue Hotel*

——短篇小説の技巧——

神 崎 浩

Nebraska の Fort Romper という小さな町に、Pat Scully の経営する、青く塗られた Palace Hotel が建っていた。ある吹雪の朝、スカリーは、神経質そうなスウェーデン人 (Swede) と、ブロンズ色に日焼けしたカウボーイ (cowboy)、そして、口数の少ない小柄な東部人 (Easterner) の三人を客としてホテルに連れて来た。High-Five というトランプのゲームを始めると、不機嫌でいらいらしているスウェーデン人は、自分はここで殺される、と言いだした。主人のスカリーは彼を自分の部屋に連れて行き、酒を飲ませるが、スウェーデン人は調子づいて横柄な態度をとり始める。再びカード・ゲームが始められ、宿の息子 Johnnie が、いかさまをやったということで、スウェーデン人と殴り合いの喧嘩となる。その喧嘩に勝ったスウェーデン人は、ますます大きな態度になり、ホテルを引きはらって出て行き、町の酒場に行き、そこに居合わせた地元の賭博師と一緒に酒を飲もうとからんで、刺し殺されてしまう。数ヶ月後、カウボーイと東部人はスウェーデン人が殺されたことについて話し合い、東部人は、自分達五人がこのスウェーデン人殺しに協力したのだ、と言うのである。

以上が *The Blue Hotel* の梗概である。

Crane は23才の時、一年間のほとんどを、西部ネブラスカとメキシコで過している。Frederic Remington の絵と、Mark Twainの小説“Huckleberry Finn”及び“Life on the Mississippi”に刺激されて、カウボーイと大きな河を見たかったからだということだが、本当の目的は、西部に

行って何か短篇小説の材料を探すことだったようである。

「書くことは他の仕事と同じだ。物事を観察する力を養い、どんな事に対しても何か『価値のある』ことが言えなければならない」⁽¹⁾と彼は言っている。

彼が23才の時、Bacheller & Johnson のシンジケートのためと、イギリスの雑誌に短篇を書くために、旅に出たのだが、実際に西部へ行っていた間には、Crane は「戦争物」を一本と、「西部物」を一本書いただけだった。その年（1895年）に書いた一本の西部物は *Horses—One Dash!* である。だが、この小説の下書きはフィラデルフィアで書かれている。さらに、彼の書いた西部物6篇のうち、たった一本がイギリスの雑誌に載り、*Twelve O’Clock* というその一本も、1899年の12月になって初めて“Pall Mall Gazette”に載ったのである。

だから、Crane は西部小説を西部にいる間には書かないで、翌年、あるいはもっと後になって書いたのだった。

The Blue Hotel は、“Collier’s Weekly” の1898年11月26日号に載ったのが最初で、翌年“The Monster and Other Stories”に収められて単行本となっている。

The Blue Hotel の物語は、吹雪の吹き荒れるフォート・ロンパーというネブラスカの小さな町に、大陸横断急行列車から、「スウェーデン人」とだけしか知られていない人物、東部人、そしてカウボーイの三人が降り立ったところから始まる。

その三人は近くにあるパレス・ホテルという青く塗られたホテルの主人スカリーの客引きによって、そのホテルに泊ることになる。

ここで注目したいのは、ホテルの名前が“Palace”であることである。これは非現実的であり、おとぎ話的であり、ロマンティックな環境を思わせるものである。また、“Romper”という町の名前も、何か子供じみた

騒々しさを思わせる。そして“light blue”というホテルの色は、無邪気、幼なさ、晴れた空、を連想する色である。その色は、馬鹿げた色であり、どんな背景に対しても目立つ色であり、町の何物にも調和しないで、「常に絶叫し咆えたてていた」⁽²⁾のである。

ホテルは東部風の造りでもなければ西部風でもなく、それ自体の世界を持っていた。状況としては、たしかに不自然ではあるが、その子供じみたセッティングの中には、ウエスタン小説の伝統的な雰囲気のパロディー化したものを含んでいる。

ここでは男達はウエスタン小説風にギャンブルをしている。しかし金を賭けてはいない。男達はいつもウエスタン小説の中でするように、喧嘩をする。だが、ガン・ファイトではない。殴り合いの喧嘩である。ホテルの住人達もまた、お定まりのウエスタン小説風の登場人物、つまり、強くて、物静かで、行動的な人物のパロディーである。パレス・ホテルにいる人物達は、口数は多いが行動的ではない。物語が後半の酒場の場面に移って、初めて本物の西部男達が登場し、彼等はスウェーデン人の行なった失敗に対して、黙って行動を起している。

ホテルに泊ることになった三人は、食事の支度が出来るまで、談話室のような小部屋に入って待っている。スウェーデン人の行動は、彼が「ひどくおびえている人間のようだ」⁽³⁾ということからも、かなり変だということは明白である。彼が何におびえているかは、すぐに推測できることだが、周囲の様子に不慣れなためであり、その不慣れさは、外の吹雪と見知らぬ男達の存在によって一層高められることになる。

その男達とは、「東部人」、「カウボーイ」の二人の旅行者と、ホテルの主人「スカリー」、彼の息子「ジョニー」である。スウェーデン人は西部の伝説的な悪人の存在を信じているようであり、これ等の男達が自分に対して、盗みを働くか、殴るか、殺してやろうと考えていると思いはじめ。

Crane は、外の吹雪を完全に閉め出してしまっている暖かいストーヴの

回りに男達が腰を下しているホテルの一室を、海のイメージとして表現している。戸外は「雪の荒れ狂う海」であり、部屋は「海の中の小島」である。このイメージの表面的な意味は、泊り客達の安全性を表わしているようであるが、*The Open Boat* にあるように、危険は一つ一つの波に潜んでいるのである。

トランプのゲームが始められると、スウェーデン人の恐怖はますます大きくなり、彼のヒステリーは他の男達をいらだたせることになる。東部人に対して、自分の恐怖感を支持してもらおうとするが、東部人は冷たくそれを拒絶してしまう。

恐らく東部人は、ジョニーがゲーム中にいかさまをやったのを見ていて、スウェーデン人が三文小説的恐怖に襲われるだけの理由を持っていること、そして、それを黙っていることで犠牲者となることを承知していたのだ。

東部人はジョニーがいかさまをやるのを見ても、それを黙っているような性格の男だったことも考慮しておく必要がある。彼は弱虫なのだ。彼には寒さが一番こたえていたし、ジョニーとスウェーデン人との喧嘩を止めようとしていた。彼はスウェーデン人の奇妙な反応に対しても強く心を動かされたようには見えない。彼の最も基本的な考えは、いかなる争い事も避けることであるかのようである。さらに、彼もまたこの物語の中心となる事件が起ることに対して、ある程度の責任があることは十分に感じていたのだった。

スウェーデン人が、このホテルから出て行くと言うと、それに対して反対する者は誰もいない。それは、彼の口のきき方や行動が、あまりにも常軌を逸していたからである。だが、ホテルの主人は、お客をなだめるのが主人としての役目だと考える。そこでスウェーデン人を自分の部屋へ連れて行き、ウイスキーを飲ませる。主人はロンパーの町に、「市街電車が来年の春にはつく」⁽⁴⁾ 予定だと、町の自慢をする。

“there’s a new railroad goin’ to be built down from Broken Arm to here. Not to mention the four churches and the smashin’ big brick school-house. Then there’s the big factory, too. Why, in two years Romper’ll be a met-tro-pol-is.”⁽⁵⁾

さらに彼は自分の「死んだ娘」の写真を見せ、長男は弁護士をしていると語る。

その間、部屋では男達がスウェーデン人について語り合っている。東部人は：

“Oh, I don’t know, but it seems to me this man has been reading dime novels, and he thinks he’s right out in the middle of it—the shootin’ and stabbin’ and all.”

“But,” said the cowboy, deeply scandalized, “this ain’t Wyoming, ner none of them places. This is Nebraska.”

“Yes,” added Johnnie, “an’ why don’t he wait till he gits *out West*?”⁽⁶⁾

スウェーデン人が部屋に帰って来た時には、ウイスキーとホテルの主人の言葉によって彼の気持は静められたかのようにだった。彼が水を飲み、部屋から出て行った時、主人は東部人の想像を裏づけるかのように、「ただ彼は東部から来たので、ここが荒っぽい所だと思っているだけなのだ」⁽⁷⁾と言った。ジョニーが、まだ彼のことを「生意気」だと言い張ると、主人は息子に対して厳しく：

“I keep a hotel,” he shouted. “A hotel, do you mind? A guest under my roof has sacred privileges. He is to be intimidated by none. Not one word shall he hear that would prejudice him in favor of goin’ away. I’ll not have it. There’s no place in this here town where they can say they ever took in a guest of mine because he was afraid to stay here.”⁽⁸⁾

と言う。

しかし、それにもかかわらず、息子のジョニーの方が正しかった。スウェーデン人は生意気過ぎた。だが、彼が主人の傷ついた肩を力一杯たたいた時も、主人の客に対する責任という生活信条は、彼に対して腹を立てることを、かろうじて止めたのだった。

スウェーデン人が、前に自分からぶち壊したランプのゲームをやろうと言い出し、二人の泊り客とジョニーは、あまり気乗りがしないまま腰を下した。彼等がゲームを始めると間もなく、スウェーデン人はジョニーがいかさまをやっていると言い、喧嘩が始まった。他の者達は二人を止めようとしたが、結局二人は家の外で喧嘩をすることになった。

ここで、スウェーデン人の恐怖心は、他の者達が全員ジョニーの勝つことを望んでいると気が付いた時、再び甦った。だが、宿の主人は、まだ自分の信念に基いて、公正な喧嘩であることを主調する。

Crane はここで、語り手に、「どんな部屋でも悲劇的な様相を呈することができるし、どんな部屋でも喜劇的になりうるのだ」⁽⁹⁾と語らせる。喜劇は悲劇を引き出すこともできるのである。

再び、人々はそれぞれの立場で行動を開始する。喧嘩の発端となったスウェーデン人は攻撃的となり、ジョニーは防御の体制をとり、東部人は青ざめ、カウボーイは牛のようにのろく混乱し、スカリーはわめき声をあげていた。

後に出てくる酒場の場面とは対照的に、この場面では男達は混乱し、騒々しく、無駄な行動をしていた。怒り狂った二人の男達と、それを止めようとする三人の男達は、その喧嘩の中で互いにしがみつき、叫び声を上げていた。床にはちらかったランプの、「色のついた太ったキングとクイーン」⁽¹⁰⁾がまのぬけた目つきで見上げているだけだった。

東部人は、カードのゲームで喧嘩をしたって何んにもならないから止めると、しつこく言うが、スウェーデン人は頑固だった。男達は殴り合いを

するために戸外へ出て行った。それはまるで、西部の決闘というよりは、“Whilomville”の町の子供達が行なう「戦争ごっこ」のようなたわいのないものだった。

吹雪の描写は、男達のひ弱さと愚かな口数の多さを、口元から言葉を引きちぎり、興奮し過ぎた無駄な論争を撤き散らすことによって、表わすためのものである。スカリーは「鉄のような神経を持った決闘の司会者」であり、スウェーデン人は「青ざめ、動かず恐ろしい形相をし」、ジョニーは「静かであるが猛々しく、野獣のようだが勇壮」であった。

ここで作者は “The entire prelude had in it a tragedy greater than the tragedy of action, ……”⁽⁴⁾ と述べている。つまり、この悲劇の幕開きは東部人の心の中にあり、人間の悲劇でもある彼の悲劇は、喧嘩よりも大きく、死よりも大きいのである。それ故、喧嘩そのものは極端なものではない。なぜなら、犠牲者の第一はスウェーデン人ではなく東部人だからである。彼は喧嘩の本当の原因を知っているが、自分の知っていることを行動に移すことは出来なかった。彼は裏切者なのである。*The Blue Hotel*の最後にあるまとめの章は、だから異質なものではない。それはもし東部人の精神的な反応が悲劇の本質であるとすれば彼の罪意識は非常に重大なものだと言えるからである。

喧嘩はスウェーデン人の勝利で終る。疲労してはいるが、勝ったという満足感で、彼はホテルを出る支度をする。宿の主人も、もう反対はしない。スウェーデン人は、今ではホテルという小さな集団の外へ出てしまうことになった。喧嘩に勝ったことから態度があまりにも大きくなり、心配してくれていた宿の主人さえも、もう彼のことは見はなしていた。スウェーデン人が闇の中に、吹き荒れる風と雪との中を、出て行った様子を Crane は：

He might have been in a deserted village. We picture the

world as thick with conquering and elate humanity, but here, with the bugles of the tempest pealing, it was hard to imagine a peopled earth. One viewed the existence of man then as a marvel, and conceded a glamour of wonder to these lice which were caused to cling to a whirling, fire-smitten, ice-locked, disease-stricken, space-lost bulb. The conceit of man was explained by this storm to be the very engine of life. One was a coxcomb not to die in it.⁽¹²⁾

と描いている。

スウェーデン人は酒場へと向って行く。孤独で誇り高く、彼は酒場へ入る。全てはホテルとは反対である。酒場の外には赤いランプがある。「何物にも負けぬ赤い灯が燃えていた」。⁽¹³⁾ Crane にとっては、丁度ブルーが生命を表わすように、赤は死の色なのである。「そのランプの光がとどく範囲を飛び回っている雪片は、血の色をしていた」⁽¹⁴⁾

店内ではバーテンダーが一人いて、四人の男達がランプをしていた。その中の一人はプロの賭博師だった。その賭博師は、この町における彼の地位を、厳しく定義づけた掟によって保っていた。彼はだまされやすい旅行者や、向う見ずの百姓から金を巻き上げることは許されていた。そして、彼は町の人達からは、尊敬できて信頼できる人物だと考えられていた。

スウェーデン人は、勝利の誇りに満ちてこれらの男達の所へ来た。吹雪から身を避ける場所を見つけて、意気が揚っていた彼は、一緒に飲んでくれる相手を求めたが、態度が横柄なために断わられてしまい、ついに賭博師に無理に飲ませようとして、喉をつかんで椅子から立たせようとした。賭博師はナイフを抜いて、スウェーデン人を刺し殺してしまう。

It shot forward, and a human body, this citadel of virtue, wisdom, power, was pierced as easily as if it had been a melon.⁽¹⁵⁾

とその時の様子が描かれている。

スウェーデン人の死体の眼は、

.....fixed upon a dreadful legend that dwelt atop of the cash-machine: "This registers the amount of your purchase."⁽¹⁶⁾

この部分は Crane が技巧をこらした個所である。スウェーデン人はスカリーが二度までも拒絶した支払いをやっとすませたのだ。それは彼のプライドの値段であり、彼の孤立の値段であり、酒場の床の上でやっと見つけた独りで居られる場所の値段だったのである。

評論家達の意見として、*The Blue Hotel* はこのレジスターの所までで終るべきだというものがある。その最も強力な意見の一つとして、R. W. Stallman は次のように書いている。

This point marks the legitimate end of the story. Crane spoiled the whole thing by tacking on a moralizing appendix. The off-key tone is at odds with the tone of the preceding part, and the theme that his beginning prepared for stands at odds with the trumped-up theme announced in the totally irrelevant and none-ironic conclusion.⁽¹⁷⁾

Stallman の意見は、もし彼が Crane の用意したテーマに関してもっと具体的に述べてくれれば、もっと理解しやすくなるのではないだろうか。つまり、レジスターに対して、もっと皮肉な手がかりを与えるなら、この物語はいかにして人間が行なった行為に対して、その人が受けるべき「罰の種類と額」が決定されるかを語ろうとしている、と言えるだろう。だが、それでは、Crane が物語の前半で描いて来た登場人物の性格とは相い反することになる。つまり、彼は人間を、「地球にしがみつかないわけに行かぬシラミ」⁽¹⁸⁾ として描いているのである。

Stallman はこのレジスターに付けられた説明書の個所に、そこに書かれた "This registers the amount of your purchase." とはまったく反

対の内容を読み取って、強烈な皮肉を感じたのだろう。しかし、そのような読み方は、物語の部分を読むことで、全体を読んだことにはならないのではないだろうか。それに、Craneは普通はシンボルをそのようには用いないのである。

最後の章でCraneは、東部人とカウボーイが後日出会ったことを明らかにしている。その時、彼等は賭博師がスウェーデン人を殺したことに對して、軽い刑だったと話し合う。彼等はスウェーデン人が死ななくてもすんだと思われる色々な事柄について話す。

“The Swede might not have been killed if everything had been square.” “Might not have been killed?” exclaimed the cowboy. “Everythin’ square? Why, when he said that Johnnie was cheatin’ and acted like such a jackass? And then in the saloon he fairly walked up to git hurt?”⁽¹⁹⁾

カウボーイの出したこの結論は、物語をこの部分まで読んだほとんどの読者と同意見のはずである。だが、東部人はもっと事情をよく知っていたので、激怒する。Craneはここで初めて、東部人に巧妙な皮肉をまじえて、次のように語らせる。

“.....Let me tell you something. Listen! Johnnie *was* cheating!”⁽²⁰⁾

この言葉で、物語の持つ意味の全ては、まったく他の次元に移行してしまふ。命を落すことになったのは、ただ単に、単純さと無知と恐怖のために過ちを犯したスウェーデン人一人に責任があるのではない。ジョニーがいかさまをやったことを知っていて、それを言わなかった東部人にも責任がある。正確な判断を欠いて、喧嘩をすることを許したホテルの主人にも責任がある。勿論、中でも最も責任の重いのは、ただ遊びでやっていたランプのゲームにいかさまを使うという、最も単純な約束事を意図的に破

ってしまったジョニーなのである。東部人が言うように、

We are all in it!.....We, five of us, have collaborated in the murder of this Swede.⁽²¹⁾

なのである。

機械が嘘をついたということは、今では明らかになった。本当の金額を記録しなかったのだ。だが、それは機械が人間の自信のなさを反映して、そのような失敗をするのである。

真のレジスターは宇宙である。つまり自然である。そして、もうすでに我々はこの機械は人間に関しては何も記録しないことに気がついている。この物語は、自然の無関心さの前に人間共が自己の存在を確立しようと苦闘する物語である。その苦闘の動機となるものは、人間の自己過信である。人間は仲間と自分を結びつけている社会的規律によって保護されている。だからこそ、その規律を守らなければならない。ジョニーと賭博師は規律の一つを破ってはいるが、まだその規律によって護られている。カウボーイは何が起ったのか理解できないという愚かさのために、規律によって護られている。東部人は、その規律が破られたことを知っているが、そのことを認めようとしない抜け目のなさで護られている。スウェーデン人は、仲間と結び合っている規律に対して鈍感過ぎたのである。彼は吹雪に立ち向ったように、人間同志が守らなければならない規律に対して、恐れながらも大胆に立ち向ったのである。皮肉にも、彼は自分が生命を落すことを恐れていた。だが、それは間違った理由からであった。誰も彼に対して計画的に殺人を行なおうとしたわけではない。少なくとも自然はそのような考えなど持ってはいなかった。彼の死は無知であったために起ったのだった。彼は、人間は内にある自然と外にある自然の両方に対して、仲間同志協力して保護し合わなければならない、ということ知らなかったのである。彼の人間同志の規律に対する無知が、社会構造を狂わせてしまい、そ

の混乱が連鎖反応となって、彼と関係を持った人間達に影響を及ぼすことになったのである。そして、スウェーデン人の死と賭博師の犯罪、という事件となって現われたのである。

東部人が適切に推測したように、ホテルでの喧嘩に引き続いて起った出来事は、起るべくして起ったものなのだ。何故なら、それはレジスターに打ち出される数字のように、必然性を持って決定されていたからである。

テキスト

The Works of Stephen Crane Vol. 10, Wilson Follett ed., Russell & Russell, New York, 1963.

注(1) Thomas Beer: *Stephen Crane: A Study in American Letters*, Alfred A. Knopf, New York, 1923. p. 252

(2) Wilson Follett ed.: *The Works of Stephen Crane Vol. 10*, p. 93

(3) *ibid.*, p. 95

(4) *ibid.*, p. 103

(5) *ibid.*, p. 103

(6) *ibid.*, p. 107

(7) *ibid.*, p. 109

(8) *ibid.*, p. 109

(9) *ibid.*, p. 112

(10) *ibid.*, p. 113

(11) *ibid.*, p. 117

(12) *ibid.*, p. 124

(13) *ibid.*, p. 124

(14) *ibid.*, p. 123

(15) *ibid.*, p. 129

(16) *ibid.*, p. 130

(17) Robert Wooster Stallman: *Stephen Crane; Stories and Tales*, Vintage Books, New York, 1955. p. 269-270

(18) Wilson Follett ed.: *The Works of Stephen Crane Vol. 10*, p. 124

(19) *ibid.*, p. 131

(20) *ibid.*, p. 131

(21) *ibid.*, p. 131